

探訪記録

佐伯 四回 霊場 探訪 (二)

巡拜の人も少なし 秋の風

会員 佐 脇 貫 一

『さむざむと影なき秋の遍路かき』これは佐々木育風という人の句、暮れ泥む秋の暮ら日は、人影もなき野路をゆく、苦悩多き人の旅姿を描いたものか。

さる日、灘の常光庵を訪れた私は、その日に驚く巡礼行として九月の終りの一日鶴見所を訪れた。野路に紅く咲く彼岸花、山径にほまだ紅葉はないが、秋の気配が日毎に濃い。

秋天高しというけれど、この日は折悪しく雨をほらんだ曇り空、鳥越、大船繋、三九郎谷、屋敷など、大江灘といわれたこの一帯は、皆から『板子一枚下は地獄』という船頭衆の郷、いまも船船搬運の事業にたずさわる人が多い。佐藤鶴谷翁の『佐伯霊場道知るべ』には四番札所から五番への道案内として、

『灘の屋敷より佐伯湾を見下して坂道を東北に辿り、と二十軒ばかりにして西中浦村大字改の奥に至る。札所は人家の入口に在り。』

とあるが、屋敷から越える灘坂は今は人の往来もなく、うさぎ道のようになっており、人の通れる道で目下という。鶴見所改浦に行く道は灘の鼻面から海岸の山腹を走る異道鶴見録、対岸女島の興人工場を眺めながら坂を越えにかかり、ニガキの鼻を左側に見ると大正時代におこった難の惨劇若爺さんのことを思い出した。私はこの坂

を自転車で改浦へ越したが『道知るべ』にもあるように改浦の札所は灘坂麓の七番阿彌陀庵から巡拜するのが便利だという。下り坂は垣々としてたのしかつた。

『東の方へは武の八島、千とせの影に箕作の、島に群居て啼く千鳥、波の鼻づらつれなくも、』

と続くのは柳半礼実録の惟治主後日向落ちの道行文。それは八幡山の頂上から眺めた佐伯湾の景色になつてゐるが、八幡山からはこの景色は眺められない。だが灘坂からは波の鼻づらと書かれた左灘の鼻面も、千とせの影の箕作(三栗島)も、武の八島も一望のうちにある、眼前に力ダが浮かんでゐるが、汚濁された佐伯湾の海の色に郷土人の嘆きと悔恨が漂うてゐる。

改浦のバス停留付近に『大友さま』とよばれてゐる墓石群がある。この大友遺跡はついでに佐伯史談第二十号に、安部力氏が調査記録をのせてゐる。私ははじめてこの遺跡を見ながら、中心に在る五輪塔はかなり大型のもので寛文以前の造立と見てよく、安部氏の記録によると同浦の天満宮境内にある大友神社の御神跡に寛文十一年夏の年九月廿五日、赤矢小左衛門と銘刻してあるというから、この五輪塔の主は寛文の祭祀以前にここに祀られた赤矢



氏が祖先といつてよい。

六香札所の阿弥陀庵は地下の庵といわれ、現在は
養賢寺の本庵だが、皆皇言宗だつたように境内墓地に
ある墓の戒名には皇言宗のものが多く、宝暦十四年の無
縫塔に四香山自覚法印と刻まれて、祥家で成なく皇
言宗である。ここには吹浦の大庄屋龜北氏の墓地がある
が、龜北氏は代々善兵衛を称したように、安永四年の大
庄屋名も軸丸善兵衛、現存の文久年間の墓銘も軸丸善兵
衛清塚である。

阿弥陀庵を徵して、吹浦製の地藏庵を寄れた。在家
風の作りだが、境内に地藏菩薩の覆屋があり、四尺許り
の尊像(座像)が安置してある。五香札所の本尊仏であ
ろう。台座に建立の銘文があり、『文政十年丁亥九月、
根州大坂産、空心建之とある。その側に法華千部供養
塔(千輿通羽、天保十年)、小型五輪塔などがある。

六香札所は真知庵、吹浦宮大河原の寄落中にある。境
域は整理されてゐるが、庵としては最も新しいように、
古墓塔は見当らない。
県道鶴見線は吹浦大河原からの辰ノ口鼻を廻るが、海岸
の山腹を縫うて眺めはよい。眼前に落かぶ八島は無人島
ぞれど、その昔は漁場の難心、魚遭を見守る曳張場があ
つた。島の南に八島菫神の社祠があり、航海、漁業の神
として、旧藩時代から佐伯湾沿岸地域の漁民に信仰され
た。温故知新録に、

『宝永八年二月五日、八島菫神の出来作、祠御神祭の
御鏡移し開眼の儀、今日大日寺遷座し、首尾よく相済
みたり。』
とあり、また御領分中寺社記には
『延享ニ乙丑年御建之相済、上月廿日御遷宮被仰付候。
とある。八島菫神は宝永八年(正徳元年)二月、六代藩

主毛利高渡が豊漁を祈願して、八丈権五の廟を離島か淨
域に建て、大日寺にこれ管理させたことになり、延
享二年五月、六代高直のとき社廟が完成した。八丈老
王とは阿部基、鹿那斯、慶餘權、徳又地、和修吉、巖代、
磯難陀、淡辺羅の八鏡王をいう。

八香地松浦の常行庵は本尊観世音菩薩をまつるとい
が、いま新築工事中、具事な寺庵が建てられてゐる。
北香札所は沖松浦の東端吉祥寺、寺域はさくらゆつ
じなど花木が多く、副都落で日公園化が進めてゐる。吉
祥寺は山号を補陀山と称するようになり観世音菩薩を本尊と
する。元龜のころ松浦に住んだ油部衆の一人成松勝三郎
正友は、ある日海岸の岩の上の座す観世音像を拾つた。

何処からかはるる海を渡つて来たものと見えて藤屑、
水多かほつまつまけて在おしたか、大悲の仏身にこもる光
は正友の心を照らした。彼は尊像を抱いておが家に帰
たが、やがて村入に及びかけ淨地を迷んで奉齋し、蒲陀
山吉祥寺と号した。貞享、元禄のころ松浦の大庄屋成松
助三郎が寺庵を再建し、真言宗大日寺と名づけた。寺域
の墓地は成松氏の墓が殆どが、御影石の五輪塔と正徳年
号の御影石の墓で、寺依りいう成松助三郎の墓ではない
かと思う。

本堂殿に大御堂がある。この本尊は表逆如來と伝へる
が定かでない。この大師堂が九香札所で、もとは比松浦
の志手ばあつたといふ。
『沖松浦より小治坂前に戻り、古き指し田圃跡を経て
北水津村浦代に越ゆる一里ばかりの坂あり、登り急に
して下り道長く艱辛なり難所なり。』
これに成道しるべに記されたお寺から十番への道案内。
哉前以信仰一途の巡礼者が生達行者の未だで、苦難の道
は御仏の慈悲を求め出る仏子の赤心と、三幅の衣に法悦の

喜びをにじませた。地松浦の志手よりかかる峠道、いまは観見、米水津両町村の産業文化調査を誘う道路計画でトンネル開さく計画もあると聞く。

さて十番の札所は十月はじめの好日、友人小谷種一君を同行し浦代峠を越えた。この日も雨もよいの曇り空、濡れるを覚悟の自転車行、天気ではとも好日とはいえないが、佐伯四回八十八ヶ所巡礼の發願を果すためなれば、功德あるは当然とあえて好日とした。

佐伯市側の米水津渠道は凹凸はげしいどろんどろだが、浦代峠新トンネルと境に米水津村側は舗装された快適な道路、はるかで見下す米水津湾は磯から幸おう海の姿である。十番札所は浄土宗の養福寺、浦代部落の山付きにある。

藏忘山養福寺は京都の智恵院末、天正九年淨榮真誓上人が開基したといふ古刹である。石段と上り山門をくぐり本堂前へ出る。二基の石灯籠があり、一つは浦代の庄屋成松六右衛門、一つは地目竹折戸兵右衛門の寄進である。浄土宗なれば本尊はもちろん阿彌陀如来、だが札所の本尊は千手観音という。どこかに観音堂があるはずと探したところ、寺背の山中に一字の堂舎が見える。登れば厄除け大師像もあり、その奥の堂舎が普門庵観音堂。

佐伯史談第六十八号に浦代の高宮祐夫氏が紹介された浦代観音堂由未記の御堂と推察したが、伝はいう観音像はない。おそらく別に秘蔵されているのだろう。この由未記は延宝八年二月白幡多福寺の賢蔵が記述したものと、その概略は入津浦の漁網にかかった観音像を漁民たちが祀っていたが、ある夜大暴風雨があり、その観音像が忽然と消え失せた。そして堅田波越村に異光を放つて現われ、金剛山我淨寺に安置されたが、天正年間大友

公の諸寺打潰して我淨寺も鳥籠に閉じ、観音像は常樂寺に移された。

延宝三年、浦代の大庄屋成松又右衛門尉政則は觀世音菩薩を信仰していたが、ある夜夢告でこの因縁を知り、いろいろを奇瑞と見友ので常樂寺からこの観音像を譲りうけ、浦代浦普門庵に奉祀したといふので、漢文体で書かれてある。

普門庵観音堂の上り口に閻魔堂がある。閻魔王像を心に地獄十王像があり、その堂前には地藏尊像(等身大)と対して、明暗表裏の世相を説いている。

十一番は竹野浦の潮月寺、釣月寺と書かれたものもあるが、御領分中社寺記には潮月寺とある。米水山潮月寺、厚保中養賢寺十世匡山座元が住していた寺で、本尊は薬師如来といわれるが、寺室の伝小野篁作といふ地藏菩薩像がある。本堂前には大衆妙典一石一字塔は宝曆八年の造立、墓地の無縫塔群の中に宝篋印塔の残骸がある。山門にいたる石段は御影石で、小浦の浜屋左右衛門、竹野浦万屋文右衛門が天保九年に寄進したものである。

十二番札所は小浦の東林庵、境域に大きな榕樹があり、また一隅に文政四年二月造立された魚鱗供養塔があつて、漁村の寺庵を感じさせる。

竹野浦に行く途中から降り出した雨は、このころ(午後二時)まで続き、東林庵を出たころ降り止んだ。

帰途粟島神社に詣でた。正平年間征西將軍懐良親王の御供としていた渡辺左衛門尉信重は豊後水道で暴風雨に遭遇、難破した船で米水津湾に入った。日頃から信仰する粟島明神を心に念じながら漂ううち小浦の浜に流れつき、不思議に生命が助かった。左衛門尉はこの地に停つて粟島明神を祀り、これに奉仕したと伝えられている。

(佐伯市志河内)